虐待とその周辺領域 14

発達障害を持つ保護者の子育て（その7）

橋本 和明（花園大学社会福祉学部教授）

ー『プロチチ』から学ぶ発達障害の父親の子育てー

逢坂みえこさんの作品の『プロチチ』（講談社）という漫画をご存じでしょうか？アスペルガー症候群である主人公の男性は会社でうまくいかずに仕事を辞めて家にいます。彼は定型発達で会社員の妻と結婚しており、その間に男児が生まれました。そこで、主人公が赤ん坊の息子の養育をするというストーリーで始まります。要するに、発達障害を有する父親の子育て奮闘記なのですが、実に素晴らしい子育てが展開されているのです。ただし、そこには父親の愛情の満ちあふれた姿や親子の情景が描いているわけではありません。なぜなら、主人公は発達障害の特性があるがゆえに、子どもへの親の愛情というのが一体何なのかがわかっていないところがあるからです。

©逢坂みえこ／講談社

ー不安ゆえの厳格な子育てー

アスペルガー症候群の特性の一つに想像力の欠如があります。主人公にもそれがあり、子育てにおいても、「12:00にミルク、おむつ。13:00に散歩、買い物。15:00にミルク、おむつ」と日課を立てています。しかし、息子が昼寝をしていて起きず、予定通りの日課がこなせずに困るシーンがあります。彼は「ミルクをとばして散歩に行って、本当にいいのか？」と真剣に悩みます。彼が言うには、「予定通りの行動をとるから予定通りの結果が出るのに、その予定を狂わされたら、結果がどうなるかわからない。僕にはそれがひどくひどく不安だ」とのことです。われわれなら、寝ている子どもが起きた時にミルクをあげたりおむつを換えればいいじゃないかと簡単なことのように思うのですが、特性がそれを邪魔します。すでに、私がこのシリーズ（「虐待とその周辺領域10」）で取り上げた「3時間ごとの授乳を徹底する母親の事例」もまさにこれと同じでした。そして、このような発達障害を有する保護者にアドバイスなり支援をする際、主人公が抱えている“不安”にどれほど理解を示したアドバイスや支援になっているかをもっと自問しなければならないのかもしれません。

ー愛なくても、世話はできるー

主人公の子どもの泣き止ませ方も独特で、抱っこをしながら「1分間に24往復」のスピードで揺らすのです。それがもっとも息子の好きな揺れらしく、それを丸一日実験で習得するのです。普通なら、息子が一番気持ちのいい揺れを親としては自然に見つけ出すように思えるのですが、彼は息子の気持ちに立つことができないので、実験でそれを見いだすわけです。また、別のシーンで、雨の中を息子を抱きかかえながら主人公が傘を差していきます。その時、彼は息子を雨に濡らさないようにするのですが、その理由を「愛のためではないと思う。物理的に息子の方が小さいからだ。息子は体積も小さく体力もなく、雨に濡れた場合、体温を奪われ病気になる確率が僕より高いから」と言うのです。通常なら、雨に濡れたら息子が可哀想とか、あるいは気持ち悪がるからといった理由が考えられそうですが、実に彼らしい理屈に合った考え方です。彼は実体のつかめないものを理解することが苦手のため愛情が何かわからず、科学的で合理的なところに行動の根拠を置いているのかもしれません。しかし、一見冷たく情が通わないように感じられるかもしれませんが、私には主人公がしている子育ては立派な子育てに思えます。そして、彼が自分で「愛がどのようなものかはわからないが、世話なら努力でなんとかなる」と言うように、必死で息子の世話をするのです。私からすると、彼のこの世話こそが愛情にほかならないわけです。

ー現代の子育て支援に求められるものー

私が『プロチチ』から学んだことは、決して子育てには愛情だけがすべてではないということです。もちろん愛情を感じ、慈愛の心を持って子育てができればそれに越したことはありません。しかし、発達障害という特性があるがために、子どもの気持ちを読み取りづらかったり、子どもに配慮した行動ができない人に対して、「愛情を持って関わってください」「子どもの気持ちになって動いてください」という支援はより彼らを苦しめることになりかねません。あるいは発達障害に限らず、子どもが生まれてもどうも愛情が感じられなかったり、関心が持てずにいる人達も大勢います。その際にも、愛情、愛情というアプローチよりも、お世話の方法を教えることが優先されると思うのです。お世話がうまくなることが、もしかすると愛情につながるかもしれません。つまり、子育ての技術をいかに提供していくのかが支援者の課題であると思えるのです。